

NPO

震災後の生活をジブンゴトとして全国に伝える

仙台市

佐藤 正実 NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台

取材日 2013.12.02

NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台 副理事長。2006 年から「仙台の原風景を観る知る」をテーマに、懐古写真集や絵葉書・古地図復刻等を出版。2009 年 NPO 法人を 3 社で設立。2010 年 4 月市民が提供した昭和の写真を中心に「クラシカルセンダイ」出版。2011 年 4 月震災記録を Web に掲載。2012 年 3 月「3.11 キラクのキロク」出版。震災後の今を記録する「3.11 定点観測アーカイブ」の活動を行なっている。2013 年度仙台市震災メモリアル等検討委員会委員。

「NPO 法人 20 世紀アーカイブ 仙台」設立

仙台の古い写真や地図に興味があり、その出版に関わる仕事をしていた時、2つの会社と知り合った。1つは、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台理事長の坂本が経営する（有）クリップクラブだ。テレシネという 8mm のアナログ映像をデジタルに変換する作業を仕事の 1 つとしていた。もう 1 つが、昭和 30 年代から仙台のテレビの CM ソングを作った東北放送施設（株）だ。どちらも昔の仙台について知る事ができる素材を持つ会社だった。

2008 年 10 月 18 日、3 社合同で「第 1 回ホームムービーの日」を仙台市歴史民俗史料館にて開催した。「ホームムービーの日」とは家庭で撮った 8mm フィルムなどのプライベート映像を持ち寄り、皆で観て楽しむイベントである。国際的な催しで毎年 10 月第 3 土曜日に世界中で開催されているが、東北ではほとんど知られていなかった。これに参加するかどうか 3 社が集まり相談した結果、仙台でも開催する事を決めた。このイベントの共催がきっかけで 2009 年 6 月に設立したのが、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台だ。

NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台は、古き仙台はどのような街だったのかを分かりやすく市民に伝え、過去とのつながりを実感できるようアーカイブ（記録）化し、後世に引き継ぐ事を目的に活動している。それぞれの会社が持つ写真や映像を高齢者施設などで上映し昔の話を聞いたり、小学校では社会学級の一環として映像を観て楽しんでもらった。その後、三越や藤崎、さくら野など百貨店でも展示するようになった。

私は仙台を本の都にする事を目的とした「Book! Book! Sendai」という会のメンバーでもある。2010 年に、8mm 映像を流し写真を展示するイベントを行なった。年配の方だけではなく若い世代の参加者も多く、昭和 30 年代の仙台の映像を流すと、当時を知る年配の方々が解説役となり、若い世代はその解説を聞く役となった。どちらも同



じ参加者なのだが、同じ写真素材でも一方は懐かしく、一方は新鮮に思える。このような世代間交流を目の当たりにして、これは面白いと感じた。自分の親や祖父母の昔話は「また始まった」と思って素直に聞けない場合が多いかもしれないが、他の方の話なら興味深く聞く事ができる。真摯に話を聞いてくれるから年配の方々には嬉しいし、若い人達も見聞きした事がない話が聞けて楽しい。そうした、同じ写真だけでも、それぞれ違った楽しみ方ができる世代間交流を促す場を提供してきた。

3月11日 14時46分

足を骨折して入院しており、3月11日はちょうど退院日だった。着替えが済み、退院する準備を終えて、4人部屋の病室でお世話になった方々にあいさつをしながら妻の迎えを待っていた。ちょうどその時に地震が来た。とても長いし、どんどん揺れが大きくなる。通常、地震は1分で揺れが収まると言われているが、その時は3分も揺れていた。1回目の揺れよりも2回目の揺れの方が大きく、本当に地球が壊れてしまうのではないかと思った。普通の健康な人でも立っているのが難しい状態で、松葉杖の私はベッドに投げ出された。そのあと妻が迎えに来て、車で自宅に帰った。帰宅中にラジオで6mの津波警報が発令されてい

る事を知った。入院していた病院が海岸線から約5kmの場所にあったので、津波が来て大丈夫なのかと心配になった。直後に津波の高さが10mに変わったとラジオから流れた。10mだったら4階建ての3階部分に住んでいる自宅も津波の被害を受けてしまうかもしれないと、妻と話しながら家路についた。

当時、子ども達は中学生と小学生で学校に行っていた。小学校からは保護者への子どもの引渡しはあとになると言われたため、とりあえず家に帰る事にした。帰る途中、コンビニエンスストアが開いていたので、立ち寄って家族4食分の食料を買った。調理をせずにそのまま食べられる冷たいソバやパンなどを買った。帰宅してみると予想通り家具や本棚などが倒れていた。相変わらず余震は続き、携帯電話の地震速報やサイレンがずっと鳴りっぱなしだった。自宅は川が合流する中洲のような場所にある。昭和61年の大雨の時に冠水しているので堤防は嵩上げしてあるが、川の水は黒色に変色して増水しながら逆流していた。目の前の光景を見て、決壊してしまうかもしれないと思った。

子どもが通う高砂中学校は津波によって冠水し、校庭に駐車していた車は使えなくなってしまうていた。発災当日、迎えに行こうと思っていたが、そうした学校の状況を近所のお母さん方の口コミで知り、学校には近寄れないと聞いたので、次の日に迎えに行く事にした。子どもの話を聞くと、残った先生と生徒達は3階に逃げ、一晩を過ごしたそうだ。

震災後、自宅は電気やガスが止まってしまった。電気が復旧したのは発災から1週間後の3月17日だった。住んでいたマンションは、電動ポンプで水を汲み上げるタイプだったので、電気が復旧しないと水も出ない。ガスも都市ガスだったため、3月末まで使う事ができなかった。それまでは灯油ストーブを活用した。灯油ストーブでお湯を沸かしてカップラーメンや鍋を食べる事ができたし、沸かしたお湯を使って体を拭く事もできたので、大活躍だった。

以前読んだ阪神淡路大震災の本の中に、発災から約1ヶ月間を指す「震災ユートピア」という言葉が書いてあった。隣近所と声をかけ合ったり、物々交換をしたり、そうした本来人間が持つ優しさがクローズアップされる時期をそう呼ぶのだ、と記されていた。電気やガスなどの社会インフラが戻ってくると次第にそのユートピアが薄らいでいくとあったが、読んだ当時はピンとこなかった。東日本大震災が起き、震災ユートピアは本当にあるのだと感じた。非常時でなければ、「皆が持っている野菜などを町内会の会長さんの家に持ち寄って炊き出しやろう」という事はまず起こらな



撮影：2011.3.14 停電の中での夕食
皿にはラップを敷いて食事（木谷智寿さん撮影）

い。水も食べ物も不足している生活で、助け合いの力を感じた。そして、確かに電気、ガス、水道が復旧してくると、声のかけ合いや物々交換は無くなっていった。

震災の画像を収集

私はツイッターをしていたので、携帯電話が使えるようになってから頻繁に自分の状況を掲載したし、他の方もさまざまな情報を掲載していた。ツイッター上で、開いているお店の情報や水が出る公園の情報など、仙台市内や身近な人達の情報がどんどん掲載された。当時、ラジオはそうした情報は流す事はなく、福島第一原子力発電所の事故に関するニュースや「〇〇さんがいません」「△△さんを知りませんか」という話を中心だった。そうした情報が必要な方もいたのだろうが、私はどこで食料が手に入り、どこで水が出ているのかなど、生活に関わる身近な情報が欲しかった。同じように感じている方々がツイッターに生活情報をあげてくれたのは助かった。

ツイッターには情報やコメントの他、写真も刻々とアップされた。それを見ていて、1995年の阪神淡路大震災発災後、震災の様子が写った写真を大量に集めたけれども、いつ、どこで撮影したかの情報が乏しかったために、活用しにくい資料になった事例をふと思い出した。その当時はフィルムカメラを使っていた時代で、携帯電話どころかデジタルカメラもない。写真を集め始めたのは、阪神淡路大震災が起きてから5年も経てからだった。5年も経ってしまうと、建物が倒れていた場所は更地になり新しい建物が建つ。そうなるからでは、どの場所を写した写真か分からなくなってしまう。写真を撮った本人が分かればよいが、本人ですらその場所が分からなくなるかもしれない。撮った場所と日付という最低限の撮影情報が分からなければ、その写真の資料的価値は無く

なってしまう。そして、このツイッターに掲載される画像は集めておく必要があるのではないかと思ったのが、2011年3月22日の事だった。

3月22日の夜に仙台市内および周辺市町村で撮った写真を撮影者名（ハンドルネームでも可）、撮影場所、撮影日時の情報と共に私宛に送って欲しい旨をツイッターに投稿した。その後、何名かの方が反応してくれて、写真を送ってくれた。

2011年4月1日、震災後、初めて事務所に行った。簡単でもよいから、まずは提供してもらった東日本大震災の画像を掲載するウェブサイトを作ろうと思った。最初に集まった約350枚の画像を地域ごとに分けて、日付順に並べ整理をし、4月8日にウェブサイトを立ち上げた。

震災の写真というと、津波被災や損壊した建物の写真をイメージすると思うが、そうした写真は新聞記者やテレビ局が集めている。私達が集めなければならないのは、震災の中の生活ぶりが見える写真ではないかと思った。しかし、震災の写真を募集してみると、提供を受けるのは被害の様子を写した写真が多かった。そこで私自身が携帯電話で撮った、震災の中の生活が分かる写真をウェブサイトに掲載した。

震災の中の生活の写真を集めた理由は、3月11日を境に非日常の生活があった事実を残しておきたいと思ったからだ。例えば、昭和20年の仙台空襲に遭った焼け野原の写真を見て、戦争を体験したおじいちゃんやおばあちゃんは、私達に戦争の話をしてくれる。戦争を体験した世代の方々に話を聞くと、今回の震災よりも戦後の方が大変だったと言う。食べ物や全く無かったからだそう。しかし、戦後を知らない私達は、どのような生活をしていたのかが実感として湧いてこない。映画やドラマのような、いかにも作られた映像だと現実味がなく、肌感覚として伝わってこない。だからこそ、生活ぶりが分かる生の画像や映像が大事だと感じた。

防災マニュアルには、3日分の食料や水を用意すべきと書いてある。これは震災の経験から作られたマニュアルだ。しかし、被災していない地域の方々には、これらが必要な理由が十分に伝わっているとは思えない。例えば、集めた写真の中にバスユニットの中に雪を入れている写真がある。これは、雪を溶かして生活用水にするためだ。他にも、ろうそくやランタンを灯して家族で夕食をとっている写真や、食器洗いに水を使わなくても済むように皿にラップを敷いている写真もある。マニュアルにラップが必要と書いてあるが、何に使うのか分からない人でも、この写真を見れば一目瞭然だ。普段ならば年中24時間開いているコンビニエンスストアが、震災時は段ボールなどで目張りして閉店している事も写真から分か

る。被写体にカメラを向けて写真を撮るという事は、当然何らかの意味がある。その写真の裏には嬉しかったり、辛かったり、苦しかったり、という撮った人の何かがあるはずだ。それらを撮った背景を紐解けば、災害時に何が必要だったのかという防災マニュアルの裏づけにもなると思っている。

東日本大震災で終わりではない。非常時は全国で起こり得る事だ。その時にどのような生活が強いられるのかをイメージしてもらう事は、とても大事だと思う。

震災後の生活ぶりを全国に伝える

2011年の冬、集めた画像をパネル化し、展示会の開催をFacebookで呼びかけた。パネルは被災の様子が分かるものと、非常時の生活の様子が分かるものを半分ずつ用意した。北海道から沖縄まで全国から希望する声があり、累計110か所で展示を行なった。パネル展示を行なった事で、全国から多くのコメントをいただいた。一番嬉しかったのは「震災時の生活ぶりがよく分かった」というコメントだった。

パネル展を行なう会場で時々お話をさせていただく機会があり、震災の中の生活をテーマにした写真を見てもらいながら話をした。関西で展示会を行なった時は、震災後の美容室の写真をお見せした。扉に「シャンプーサービスを行ないます」と貼紙がある。ところが、その写真を見ても、皆さんピンとこない顔つきで、なぜこの写真が震災の写真なのかと聞かれた。プロパンガスではない都市ガスの一般家庭では、1ヶ月以上ガスが復旧しなかった。そのため、お風呂に入れない人が多く、プロパンガスを使っている理美容室で髪を洗うサービスが行なわれたと話し、やっと納得して



撮影：2011.11 宮城県仙台市 藤崎での上映・展示会

いただけた。生活ぶりを伝えて初めて分かる事も多い。だからこそ具体例として写真をお見せし、言葉を付け加える。自分も逆の立場だったらそう思うのだろう。多くの人が、自分の地域ではまさか起こるわけがないと思っている。これは、健康体の人が自分は病気になるとは考えないのと同じだ。震災後の生活の写真を見る事で、初めて“ジブンゴト”にするきっかけになるのではないかと考えている。

2013年3月、集めた画像と震災体験をまとめた書籍「3.11キヲクのキロク～市民が撮った3.11大震災 記憶の記録」を発刊した。マスメディアが市民生活に入り込む事はあまりない。だから、出版するものには悲惨な画像が多く、当然ながら生活を写したものはほとんどない。マスメディアと市民メディア、それぞれの役割はあるのだが、東日本大震災の壊滅的なまちの様子の写真、泣き崩れる家族の姿、自衛隊の救援活動、避難所での不安な生活、最後に公園で子ども達が元気に走る写真で希望を示す…ような、作ったストーリーに合わせて震災写真をはめ込んでいく編集に、私は馴染めない。

東日本大震災で起きた事実にストーリーをつけるほど、まだ年数は経っていない。全体像を把握してきちんと編集する事ができるようになるのは、おそらく10年～20年後の事だろう。事実を客観的に見る事ができる時代が来て、初めてできるのだと思う。将来の人々が3.11を振り返った時にミスリードをしないよう、注意が必要だ。脚色された震災に関する本や資料の方が見慣れている全国の方々は、「こんなにひどかったのね」「かわいそうだったね」と思ってくくださるかもしれない。しかし、それでは非常時の生活ぶりは伝わらないままだ。だから、「3.11キヲクのキロク」では編集でほとんど手を加えず、地域毎に日付順に並べ、生の状態のままパッケージにした。

本の後半に、写真を提供してくださった方々へのインタビュー記事を書いている。東京の方にライターとして協力していただいた。震災を経験した地元ライターに依頼しなかったのは、1つはまだ発災から半年後で気持ち的に大変だろうと思った事。もう1つは「震災ってこういうもの」という体験や先入観を持っていない方が客観的な体験談になると思ったからだ。お願いした方は毎週仙台に足を運んでくださった。決してお涙頂戴的な内容にするのではなく、その方のありのままの体験談としてまとめようと話し合った。

全国の方にこの震災を自分の事のように考えて欲しいし、次世代に伝え、未来に課題を託したいからこそ、写真を残さなければいけないと思っている。“非”被災地の人と次世代は、「震災を体験していない」という点で共通していると思う。よく



撮影：2013.9.28 宮城県仙台市
もういちど見てみよう3.11ツアー（若林区荒浜）

後世に残すと言うが、私は「後世の人」と「非被災地の人」に伝える事は同義だと思っている。

震災を後世に伝えるには

伝える活動は、20世紀アーカイブ仙台のスタッフや同世代のみの活動であってはならない。大学生など若い人達と共にプロジェクトを立ち上げて行なうべきだと思っている。一緒に考えて、なぜやらなければならないのか、私達がなぜそう思っているのかを伝えつつ、どう解釈して活動につなげていくのか。互いに影響し合いながらプロジェクトを起こす事が必要だと思う。

2013年1月と4月に、大学のインターン生3人と「もう一度見てみよう3.11ツアー」を企画し、プロジェクトを立ち上げた。震災直後に撮られた写真と現在を見比べる、定点撮影を使った被災地ツアーだ。学生はどのようなコースをたどり、ツアーゲストに何を伝えたいのか、半年間かけてツアー企画を練った。仙台の街中から車で約20分の場所にある若林区荒浜地区や、訪れる度に変化する名取市閑上の日和山周辺など、仙台中心部からの距離感を考えながら、震災後に変化したところとほとんど変わらないところがツアーコースに盛り込まれた。そして、彼らは主催者としてツアーで語るべき事を考えるために、震災の事や地域の歴史など多くの事を学んだ。プロジェクトの立ち上げから半年後、仙台市内の留学生や県外の学生を対象に、全部で5回のツアーを行なった。ツアーを組み立てた彼らが半年間、被災地や地域について学んだ事は、震災に向き合った重要な時間だったと思う。彼らはまた誰かに、このプロジェクトで学んだ事を伝えるだろう。このような取り組みを、繰り返しいろいろな人達と行なう事ができるのなら、次世代にきちんと震災を伝えられると思う。後世に残す手段は写真だけではない。こうした活動で人々の思いや地域の変化を残していく

事ができると思う。だからこそ、世代に関係なく取り組む事が重要になってくる。

仙台を震災アーカイブの先進都市に

今後、3.11のための拠点が必要になってくと思う。いろいろな人達が自由に集まって語れる、資料を持ち寄れる、語る、見る、聞く、の常設の拠点だ。震災アーカイブに関わる団体が集まる機会はあるが、常駐スタッフがいて、震災について話す事ができる、自由に出入り可能な市民の交流の場が仙台にはまだない。「震災メモリアルセンター」のような施設はいずれできると思うが、それを待たずに、小さくても皆が集まって震災を語れる場所が必要だと思っている。

今後の一番の課題は「活動の継続」だ。そのためには活動費用も必要になってくる。震災後、さまざまな補助金や助成金が出されたが、2年半以上が経ち減少もしている。目新しい活動には活動助成もあるだろうが、震災を語り合う事や写真を撮り続ける事はルーティンワークの1つと見なされやすく、継続的に活動を続ける事が難しいのが現状だ。数十年規模で市民と一緒にいる震災アーカイブという活動を、やる気だけで続けていく事はできない。その意味では震災から3年を迎える今が正念場なのかもしれない。

継続する事で大きな意味を持つ活動もある。集めた写真の定点撮影を行なうために、去年も同じ場所で写真を撮った。変化のあるところ、変化のないところははっきりしている。3年後、5年後、どう変化していくのかを撮り続ける事で、将来的に防災・減災、まちづくり、教育などの分野で研究される素材にもなると思う。

被災3県の中で、政令指定都市は仙台市だけだ。仙台市が東北6県の経済、そして復興の牽引役を担うと同時に、震災復興アーカイブの先進的役割を担うべきだと思っている。仙台は過去何度も地震・津波被害に遭いながら、その度に立ち直ってきた。

19年前の阪神淡路大震災を例に挙げれば、非体験者がすでに人口の4割を超えたそう。今取り組まなければ、どんどん世代交代してしまう。「防災のまち仙台」のかけ声で終わるのではなく、100万人の体験と知恵を集め、今度こそ後世に震災の記憶と記録を残し、アーカイブを活用した全国一の防災都市になる事を願っている。



【定点観測】2011.3.21 海岸線から約3キロ先の仙台東部道路まで一面漂流物（名取）（撮影／三浦隆一さん）



【定点観測】2012.4.29 一年後、塩害処理作業が進む。まだ田植えはできない（撮影／NPO法人20世紀アーカイブ仙台）



【定点観測】2013.9.14 震災から2年目、除塩を終え青々とした田が広がる（撮影／NPO法人20世紀アーカイブ仙台）